



Title	札幌農学校・東北帝国大学農科大学付設の林学課程の卒業生の動向について
Author(s)	佐々木, 朝子
Citation	北海道大学大学文書館年報, 16, 23-37
Issue Date	2021-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81438
Type	bulletin (article)
Note	この記録に対し、正誤表が掲載されています。このページ内の「HUSCAP内関連資料」のリンクから、訂正記事をご覧ください
File Information	16_2.pdf



[Instructions for use](#)

< 研究ノート >

札幌農学校・東北帝国大学農科大学付設の林学課程の卒業生の動向について

佐々木 朝子

はじめに

札幌農学校は、1899年5月に「森林科」を設置した。森林科は「林業ニ関スル中等教育ヲ授ク」¹⁾と規定された、修業年限三年の課程で、入学資格は「中学校三学年ヲ修業シタル者」もしくはそれと「同等程度ノ入学試験ニ及第シタル者」であった。入学資格は、1901年7月に中学校卒業程度に改められた²⁾。1905年3月には、森林科は「林学科」と改称され、卒業生は「林学得業士」を称することができるようになった³⁾。

1907年9月に設置された東北帝国大学農科大学には「林学科」が付設された。林学科は「林業ニ関スル高等教育を授ク」と規定された修業年限三年の課程で、入学資格は「中学校ヲ卒業シタル者若クハ専門学校入学者検定規程ニ拠リ合格シタル者」⁴⁾であった。1910年9月に農科大学に「林学科」が設置されると、既存の林学科は、「林学実科」に改められた。

1918年4月に北海道帝国大学が設置されると、農学部の附属課程として「林学実科」が設置された。林学実科は、同じく農学部に附属する「農学実科」とともに「農業並ニ林業ニ必要ナル高等教育ヲ授クルヲ目的」とする、修業年限三年の課程である。入学資格は、①中学校卒業生、②甲種農業学校卒業生、③専門学校入学者検定合格者、④専門学校の入学に関し中学校卒業生と同等の学力があると文部大臣から指定を受けた者の四種である⁵⁾。林学実科は1945年6月に廃止となった⁶⁾。

札幌農学校森林科・林学科、東北帝国大学農科大学林学科・林学実科の卒業生数は、それぞれ表1及び表2の通りである。札幌農学校森林科・林学科より75名、東北帝国大学農科大学林学科・林学実科より216名が卒業した。また、後継の北海道帝国大学農学部附属林学実科は、廃止となる1945年までの間に768名の卒業生を送り出した。札幌農学校森林科から北海道帝国大学農学部附属林学実科を通じた卒業生の総数は、1,059名にのぼる⁷⁾。

本稿では、札幌農学校森林科・林学科、東北帝国大学農科大学林学科・林学実科の卒業生（1899～1917年卒業）を対象として、札幌農学校及び東北帝国大学農科大学付設林学課程の教育が卒業生の卒業後の職務にいかなる影響を与えたのか明らかにするための準備段階として、卒業生の卒後について調査を行う。

調査に際しては、林学科・林学実科の生徒、教官、卒業生などを会員とする同窓会組織「林学会」の会報『林学会報』所載の「会員名簿」及び「会員動静」等の記事⁸⁾と、林学

会（後に「札幌林学会」に改称）が発行した『林学会々員名簿』⁹⁾を主な資料として用いる。

表1 札幌農学校森林科・林学科卒業生数（1902-1907年）

課程／卒業年	1902	1903	1904	1905	1906	1907
森林科	4	3	15			
林学科				17	19	17

典拠)「統計」『北大百年史 通説』(北海道大学、1982年、136-137頁)により作成。

表2 東北帝国大学農科大学林学科・林学実科卒業生数（1908-1917年）

課程／卒業年	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917
林学科	20	23								
林学実科			18	22	16	24	21	20	25	27

典拠)「統計」『北大百年史 通説』(北海道大学、1982年、141-144頁)により作成。

1. 付設林学課程卒業生の職業

札幌農学校森林科・林学科、東北帝国大学農科大学林学科・林学実科、北海道帝国大学農学附属林学実科の卒業生について、1902年から1934年にかけての職業別の人数は表3の通りである。

「1918年10月」以降は、卒業生に北海道帝国大学農学部附属林学実科の卒業生が加わる。参考のため、各項目の左列に札幌農学校森林科・林学科および東北帝国大学農科大学林学科・林学実科の卒業生数を、右列に北海道帝国大学農学部附属林学実科の卒業生を含む卒業生の総数を示した。

調査には、『札幌農学校一覧』、『東北帝国大学農科大学一覧』、『北海道帝国大学一覧』より、課程、卒業年ごとに卒業生の職業の統計「卒業生職業別」「卒業生職業別表」を用いた。ただし、『札幌農学校一覧』は、札幌農学校森林科第一期生が卒業『札幌農学校一覧 自明治三十五年至明治三十六年』(1902年12月発行)以降の発行分を使用した。なお、『北海道帝国大学一覧 昭和十年』(1935年10月発行)以降に発行された『北海道帝国大学一覧』には卒業生の職業別人数の統計が掲載されない。

また、表3の職業別分類は、各年で小異がある「卒業生職業別」等の項目を、筆者が分類し、項目名を付したものである。「官公庁勤務」の項目には、「卒業生職業別」等で「技術官」、「其他官公吏」「官庁嘱託」として集計された人数をまとめた。同様に、「学校職員」の項目には「職業学校教師」「専門学校教員」「学校教員」「大学及専門学校教員」「学校職員」「大学及専門学校職員」として集計された人数を、「会社員」の項目には「会社員」「銀行会社員」として集計された人数を¹⁰⁾、「学生」の項目には「大学選科生」「大学生及研学」

「大学生及選科生」「学生」「大学学生」として集計された人数を、「実業」の項目には「実業」として集計された人数を、「兵役」の項目には「兵役」「一年志願兵」として集計された人数を、「その他」には「卒業生職業別」等の項目のうち、該当する卒業生が存在する場合にのみ立項された「技術者」¹⁾、「新聞社員」、「海外渡航」、「農場監督産業組合及農会員」をまとめた。

表3 森林科・林学科・林学実科卒業生の職業別数（1902-1934年）

年月	官公庁勤務		学校職員		会社員		学生		実業		兵役		その他	
	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②
1902年10月	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—
1903年11月	4	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
1904年10月	16	—	3	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
1905年9月	16	—	5	—	3	—	1	—	—	—	4	—	—	—
1906年12月	29	—	8	—	5	—	1	—	—	—	9	—	—	—
1907年12月	39	—	7	—	11	—	1	—	—	—	10	—	—	—
1908年12月	56	—	15	—	8	—	1	—	—	—	9	—	—	—
1909年10月	77	—	17	—	12	—	4	—	1	—	2	—	—	—
1910年10月	88	—	18	—	12	—	5	—	2	—	2	—	1	—
1911年7月	88	—	18	—	12	—	5	—	2	—	2	—	1	—
1912年10月	118	—	15	—	14	—	4	—	20	—	1	—	—	—
1913年10月	120	—	18	—	23	—	4	—	24	—	0	—	—	—
1914年10月	128	—	21	—	27	—	2	—	25	—	2	—	1	—
1915年12月	149	—	22	—	28	—	3	—	22	—	2	—	1	—
1916年11月	153	—	23	—	39	—	7	—	25	—	3	—	1	—
1917年11月	161	—	21	—	54	—	5	—	33	—	0	—	1	1
1918年10月	160	167	19	20	58	68	5	5	26	27	4	4	1	1
1920年3月	148	161	18	21	68	79	3	6	30	31	0	7	1	1
1921年6月	149	192	23	35	62	86	1	10	31	34	1	1	1	2
1922年3月	149	191	25	36	59	77	0	8	33	37	0	8	2	2
1923年10月	156	229	33	48	60	69	0	13	33	40	0	4	2	2
1924年10月	154	247	31	47	58	72	1	14	37	42	0	4	2	2
1925年10月	139	233	30	52	59	74	1	15	48	65	0	11	2	2
1926年10月	139	254	30	53	59	81	1	17	48	65	0	5	2	2
1927年6月	139	270	30	55	59	85	1	18	48	65	0	5	2	1
1928年6月	139	290	30	57	58	87	1	16	47	62	—	—	1	1
1929年6月	120	272	30	62	54	92	0	5	68	99	0	5	1	2
1930年10月	117	292	34	67	54	93	0	1	65	91	0	3	1	2
1931年10月	115	297	33	69	54	92	0	1	63	87	—	—	1	2
1932年10月	116	313	33	75	54	93	0	1	63	88	—	—	1	2
1933年10月	113	340	33	75	54	93	—	1	63	89	—	—	1	1
1934年9月	86	346	9	39	45	82	1	1	40	57	1	1	0	—

典拠）『札幌農学校一覽』『東北帝国大学農科大学一覽』『北海道帝国大学一覽』所載の「卒業生職業別」等。

注1）各項目の①列は札幌農学校森林科・林学科及び東北帝国大学農科大学林学科・林学実科卒業生数を、②

列は北海道帝国大学農学部附属林学実科卒業生を含む卒業生の総数を示す。

注2）表の「—」は出典元に立項がないことを示す。

注3）「年月」は「卒業生職業別表」の現在年月もしくは『一覽』の発行年月である。

注4）典拠中で「不詳」「未定」「死亡」として集計された人数は本表に含めない。

表3より、各勤務先職業について、以下(1)～(5)の傾向を読み取ることができる。

(1) 第1期生の札幌農学校森林科卒業後の1902年10月から1934年9月を通して、最も多いのは「官公庁勤務」であった。第一期卒業直後の1902年から継続的に増加し、1912年には100人を超え118人が官公庁で勤務している。1915年には149名となり、前年の128名から大幅に増加した。北海道帝国大学農学部附属林学実科の卒業生を含めた官公庁の勤務者数は増加し続けており、1923年には229名、1934年には337名にのぼった。札幌農学校・東北帝国大学農科大学付設林学課程の卒業生に限ると、官公庁での勤務者が最も多かったのは、161名が勤務していた1917年である。その後は、前年から7名の増加が見られる1923年を除いて、人数が減少している。

(2) 「学校職員」の項目によると、教育機関での勤務者は1903年に初めて現れた。1914年に21名に増加してから、1920年までは20名前後の人数で推移していた。1921年に35名となって以降、増加を続け、1933年には75名まで増加した。うち、札幌農学校及び東北帝国大学農科大学付設林学課程の卒業生は、1923年から1933年にかけて、おおよそ30人前後が学校教員となっている。

(3) 「会社員」として勤務する卒業生の人数は、1905年に3名の該当者が初めて現れて以来増加傾向にある。1933年には北海道帝国大学農学部附属林学実科卒業生を含めて93名にのぼった。札幌農学校及び東北帝国大学農科大学付設林学課程の卒業生に限ると、最も多かったのは1921年の86名であった。

(4) 卒業後に、「学生」としてさらなる高等教育を受ける卒業生もいた。1905年に初めて現れ、1927年には、北海道帝国大学農学部附属林学実科卒業生も含めて18名が進学していた。札幌農学校・東北帝国大学農科大学付設林学課程の卒業生は、1905年～1921年、1924年～1928年、1934年に在学中の者を確認できる。

(5) 初めて「実業」に従事する卒業生が確認できるのは1909年の1名である。1910年、1911年の実業に従事する卒業生数は2名だが、1912年に20名へと増加する。その後は20名から40名程度で推移するが、1925年には北海道帝国大学農学部附属林学実科卒業生を含む全体の人数が65名に増加し、1929年には99名まで増加する。札幌農学校・東北帝国大学農科大学付設林学課程卒業生についても、1929年に68名が実業に従事しており、表3の期間内では最多の人数であった。

2. 官公庁で勤務した卒業生

本節では、卒業生のなかでは最も多い、官公庁での勤務者について具体的に確認していくものとする。

2-1. 札幌農学校森林科・林学科卒業生の勤務先 (1902-1907年)

卒業生名簿を所載する『林学会報』が発行された1907年12月以前の、卒業生の動向につ

いて、まとまった資料は未見である。ただし、『文武会雑誌』第40号「会報」には「森林科記事」として第一期卒業生の伊藤彌次郎、廣瀬久雄、牧長三の異動を記載する¹²⁾ほか、第42号「雑報」には「森林科卒業生動静」として、森林科第一期、第二期卒業生のうち5名の勤務先を記載している。表4は、上記のうち官公庁で勤務した卒業生の勤務先の一覧である。

1903年、1904年には、台湾総督府で勤務する1名を除いて、森林科卒業生は北海道庁で勤務していたことがわかる。1903年に技手を務めた2名の勤務部署は未詳である。ただし1904年に北海道庁で勤務していた2名については、「林務課」「林務課空知派出所」で勤務しており、林業に関する実務的な職務を担っていたことが推察できる。

表4 札幌農学校森林科卒業生の勤務先一覧（1903-1904年）

年	勤務先 [部署・職種 (人数)]
1903年	北海道庁[技手(2)]
1904年	北海道庁[林務課(1)、林務課空知派出所長(1)]、台湾総督府深坑局(1)

典拠)『文武会雑誌』第40号(1903年3月)、42号(1904年6月)。

2-2. 東北帝国大学農科大学林学科・林学実科卒業生の勤務先（1907-1917年）

卒業生の勤務先等の一覧を掲載する『林学会報』、『林学会々員名簿』により、1907年から1917年にかけて、官公庁で勤務していた卒業生の動向について調査を行った。表5は、1907年1月から1907年11月にかけて、各年の卒業生が勤務していた機関と職名を一覧にしたものである。

表5 森林科・林学科・林学実科卒業生の勤務先官公庁一覧（1907-1917年）

年月	勤務先 [職種 (人数)]
1907月1月	農商務省山林局[不明(4)]、宮内省御料局[不明(2)]、台湾総督府[不明(2)]、北海道庁[不明(16)]、県庁等[技師(1)、不明(3)]
1909年5月	農商務省山林局[不明(11)]、宮内省帝室林野管理局[不明(7)]、韓国統監府[不明(2)]、樺太庁[不明(2)]、台湾総督府[不明(2)]、北海道庁[不明(30)]、県庁等[県技手(3)、県林業技手(1)、不明(4)]
1910年10月	農商務省山林局[山林技手(11)、技手(2)、山林属(2)、不明(13)]、宮内省帝室林野管理局[不明(7)]、鉄道院[北海道鉄道管理局(4)]、朝鮮総督府[技手(7)、林野技手(1)、不明(1)]、樺太庁[不明(2)]、台湾総督府[不明(1)]、北海道庁[技手(8)、属兼技手(2)、不明(12)]、県庁等[技手(1)、林業技手(5)、不明(5)]
1911年	農商務省山林局[山林技手(12)、技手(7)、山林属(2)、不明(11)]、宮内省帝室林野管理局[不明(9)]、鉄道院[不明(3)]、朝鮮総督府[技手(4)、不明(11)]、樺太庁[不明(2)]、北海道庁[技手(10)、属兼技手(2)、不明(11)]、県庁等[県林業技師(1)、県技手(1)、県林業技手(5)、不明(3)]
1912年5月	農商務省山林局[技手(31)、不明(2)]、宮内省帝室林野管理局[技手(11)、不明(1)]、鉄道院[技手(2)]、朝鮮総督府[技手(13)、不明(1)]、樺太庁[技手(1)]、北海道庁[技師(1)、技手(23)、属兼技手(2)、林業技手(1)]、県庁等[県技師(1)、県技手(7)、県林業技手(1)、不明(2)]、南満州鉄道株式会社[不明(1)]

年月	勤務先 [職種 (人数)]
1912年12月	農商務省山林局[技手(27)、不明(2)]、内務省大阪土木出張所[不明(1)]、宮内省帝室林野管理局[技手(10)、不明(3)]、鉄道院[技手(2)、不明(2)]、朝鮮総督府[技手(19)]、樺太庁[技手(1)]、台湾総督府[属(1)]、北海道庁[技師(1)、技手(23)、属(2)、不明(1)]、県庁等[県技師(1)、県技手(9)、不明(1)]、南満州鉄道株式会社[不明(1)]
1913年11月	農商務省山林局[山林技手(30)]、内務省大阪土木出張所[技手(1)]、鉄道院[技手(2)、雇(1)、臨時職員(1)、不明(1)]、朝鮮総督府[技手(10)、道技手(9)]、樺太庁[技手(1)]、台湾総督府[書記兼技手(1)]、北海道庁[技師(1)、技手(20)、属兼技手(4)、林業技手(1)、事業手(2)、不明(1)]、県庁等[県技師(1)、県技手(1)、県林業技手(1)、県技手兼林業技手(8)、郡林業技手(1)]、南満州鉄道株式会社[不明(1)]
1914年12月	農商務省山林局[技手(16)、山林技手(15)]、内務省大阪土木出張所[技手(1)]、宮内省帝室林野管理局[技手(13)、不明(1)]、鉄道院[技手(4)、不明(1)]、朝鮮総督府[技手(12)、道技手(8)、不明(4)]、樺太庁[技手兼属(1)]、台湾総督府[技手(1)、書記兼技手(1)]、北海道庁[技師(1)、技手(25)、属兼技手(4)、林業技手(1)]、県庁等[県技師(1)、県技手(9)、郡技手(4)]、南満州鉄道株式会社[不明(1)]
1916年11月	農商務省山林局[技手(10)、山林技手(22)、不明(7)]、内務省大阪土木出張所[技手(1)]、宮内省帝室林野管理局[技手(14)、不明(1)]、鉄道院[技手(2)、不明(3)]、朝鮮総督府[技手(13)、道技手(10)、不明(3)]、樺太庁[技手兼属(1)、不明(1)]、台湾総督府[技手(2)、書記兼技手(1)]、北海道庁[技師(2)、技手(18)、属兼技手(2)、林業技手(7)、不明(7)]、県庁等[県技師(2)、県技手(14)、県林業技手(5)、郡技手(2)、郡林業技手(1)、不明(1)]、南満州鉄道株式会社[不明(2)]
1917年11月	農商務省山林局[技手(4)、山林技手(31)、森林主事(1)、不明(4)]、内務省大阪土木派出所[技手(1)]、宮内省帝室林野管理局[技手(14)、不明(1)]、鉄道院[技手(3)、不明(2)]、朝鮮総督府[技手(11)、道技手(13)、不明(1)]、樺太庁[技手兼属(1)]、台湾総督府[技手(3)、書記兼技手(1)、嘱託(1)]、北海道庁[技師(2)、技手(24)、属兼技手(2)、林業技手(5)、不明(2)]、県庁等[県技師(2)、県技手(16)、県林業技手(7)、県技手林業技手(3)、郡技手(1)、郡技手林業技手(1)、不明(1)]、南満州鉄道株式会社[不明(3)]、関東都督府[不明(1)]

典拠『林学会報』第1号～第10号(1907年1月～1914年12月)所載の「会員名簿」及び『林学会々員名簿 大正五年十一月末日現在』、『シルバ会林学会会員名簿 大正六年十一月末日現在』。

表5には、職名として、各機関に「技師」「技手」「属」等が見える。うち、「技師」「技手」は技術を司り、「属」は事務を司っていた。たとえば「山林局」では職員として「山林局事務官」「山林技師」「山林属」「山林技手」を置き¹³⁾、事務を司る職員として「山林局事務官」を、山林局事務官の下の位階として「山林属」を置き、林業に関する技術を司る職員として「山林技師」を、山林局技師の下の位階として「山林技手」を置いていた¹⁴⁾。

次に、表5より各機関の職名別の勤務者数を見ると、1907年時点では、農商務省所管の国有林を管理する「山林局」(1885年設置)で4名、皇室が所有する御料林を管理する宮内省所管の「御料局」(1885年設置、1908年「帝室林野管理局」に改称)で2名、「台湾総督府」(1896年設置)で2名、「北海道庁」(1886年設置)で15名、「県庁等」で9名が勤務していた。うち、職名が明らかになっているのは、「県庁等」で勤務する「技師」「技手」各1名である。

1909年には、韓国統監府(1905年設置)、「樺太庁」(1907年設置)で勤務する卒業生が見られる。1910年には、鉄道院所管の「北海道鉄道管理局」(1908年設置)、「朝鮮総督府」

（1910年設置）で勤務する卒業生も確認できるようになる。職名が明らかになるのは、山林局の「山林技手」11名、「山林属」2名、「技手」2名、朝鮮総督府の「技手」7名、「林野技手」1名、北海道庁の「技手」8名、「属兼技手」2名、県庁等の「技手」1名、「林業技手」5名である。

1912年5月には「南満州鉄道株式会社」（1906年設立）で勤務する者が、1912年12月には、国の土木事業を行う内務省所管の「大阪土木出張所」（1905年「第五区土木監督署」を改称・改組）で勤務する者が、1917年11月には、「関東都督府」（1906年設置）で勤務する者が現れた。

「山林技手」「林業技手」等を含め、「技手」として勤務する者が多い傾向は変わらず、1912年5月には97名中92名（うち2名は属を兼任）、1913年には113名中90名（うち4名は属を兼任）、1916年には150名中125名（うち3名は属を兼任）が、「技手」、「山林技手」、「林業技手」、県や郡の「林業技手」であった。

次に、各機関別に、卒業生の勤務部署、勤務地を調査し、以下の表6～表11にまとめた。

表6 森林科・林学科・林学実科卒業生の農商務省山林局勤務先一覧（1907-1917年）

年月	勤務先（人数）
1907年1月	宮城大林区署(1)、東京大林区署(1)、鹿児島大林区署(2)
1909年5月	青森大林区署(4)、秋田大林区署(2)、東京大林区署(2)、高知大林区署(3)
1910年10月	青森大林区署(3)、青森大林区署小泊小林区署(1)、青森大林区署大畑小林区署(1)、青森大林区署増川小林区署(1)、青森大林区署川内小林区署(1)、青森大林区署青森小林区署(1)、青森大林区署湯口小林区署(1)、宮城大林区署(2)、宮城大林区署浪江小林区署(1)、宮城大林区署福島小林区署(1)、宮城大林区署原町小林区署(1)、宮城大林区署鍛冶谷沢製材所(1)、秋田大林区署(1)、秋田大林区署早口小林区署(1)、秋田大林区署大館小林区署(1)、秋田大林区署七日市小林区署(1)、秋田大林区署五城目小林区署(1)、秋田大林区署仁鮎貯木場(1)、東京大林区署秩父小林区署(1)、高知大林区署(3)、高知大林区署下山小林区署(1)、高知大林区署馬路小林区署(1)、高知大林区署須崎小林区署(1)
1911年	青森大林区署(6)、青森大林区署小泊小林区署(1)、青森大林区署大畑小林区署(1)、青森大林区署川内小林区署(1)、青森大林区署増川小林区署(1)、青森大林区署湯口小林区署(1)、宮城大林区署(3)、宮城大林区署浪江小林区署(1)、宮城大林区署福島小林区署(1)、宮城大林区署原町小林区署(1)、宮城大林区署鍛冶谷沢製材所(1)、秋田大林区署(3)、秋田大林区署早口小林区署(1)、秋田大林区署大館小林区署(1)、秋田大林区署五城目小林区署(1)、秋田大林区署仁鮎貯木場(1)、東京大林区署(1)、大阪大林区署高山小林区署(1)、広島大林区署(1)、高知大林区署(2)、高知大林区署下山小林区署(1)、高知大林区署中村小林区署(1)、高知大林区署馬路小林区署(1)、高知大林区署須崎小林区署(1)
1912年5月	青森大林区署(4)、青森大林区署中里小林区署(1)、青森大林区署小泊小林区署(1)、青森大林区署増川小林区署(1)、青森大林区署沼宮内小林区署(1)、青森大林区署川内小林区署(1)、青森大林区署大鱈小林区署(1)、青森大林区署大鱈製材所(1)、宮城大林区署(4)、宮城大林区署岩城浪江小林区署(1)、宮城大林区署原町小林区署(1)、宮城大林区署鍛冶谷沢製材所(1)、秋田大林区署(3)、秋田大林区署大館小林区署(1)、秋田大林区署仁鮎貯木場(1)、東京大林区署(1)、大阪大林区署高山小林区署(1)、広島大林区署(1)、高知大林区署(2)、高知大林区署津大小林区署(1)、高知大林区署中村小林区署(1)、高知大林区署須崎小林区署(1)、高知大林区署馬路小林区署(1)、鹿児島大林区署業務課利用係(1)

年月	勤務先 (人数)
1912年12月	青森大林区署(3)、青森大林区署中里小林区署(1)、青森大林区署小泊小林区署(1)、青森大林区署増川小林区署(1)、青森大林区署沼宮内小林区署(1)、青森大林区署川内小林区署(1)、青森大林区署大鰐小林区署(1)、青森大林区署大鰐製材所(1)、宮城大林区署(5)、宮城大林区署鍛冶谷製材所(1)、秋田大林区署(1)、秋田大林区署大館小林区署(1)、秋田大林区署角館小林区署(1)、秋田大林区署仁鮎貯木場(1)、東京大林区署(1)、大阪大林区署高山小林区署(1)、広島大林区署(1)、高知大林区署田野々小林区署(1)、高知大林区署津大小林区署(1)、高知大林区署下川口小林区署(1)、高知大林区署須崎小林区署(1)、高知大林区署奈半利小林区署(1)、鹿児島大林区署業務課利用係(1)
1913年11月	青森大林区署(2)、青森大林区署横浜小林区署(1)、青森大林区署増川小林区署(1)、青森大林区署相内小林区署(1)、青森大林区署野辺地小林区署(1)、青森大林区署大鰐小林区署(1)、青森大林区署盛岡小林区署(1)、秋田大林区署(2)、秋田大林区署新庄小林区署(1)、秋田大林区署大館小林区署(1)、秋田大林区署角館小林区署(2)、東京大林区署施業案係(1)、東京大林区署浪江小林区署(1)、東京大林区署水戸小林区署(1)、東京大林区署平小林区署(1)、大阪大林区署(1)、大阪大林区署船津小林区署(1)、高知大林区署津大小林区署(1)、高知大林区署下川口小林区署(1)、高知大林区署宿毛小林区署(1)、高知大林区署田野々小林区署(1)、高知大林区署奈半利小林区署野川山斫伐所(1)、熊本大林区署林務課(1)、熊本大林区署水俣小林区署(1)、鹿児島大林区署業務課利用係(1)
1914年12月	青森大林区署(1)、青森大林区署利用係(1)、青森大林区署施業案係(3)、青森大林区署川尻小林区署(1)、青森大林区署横浜小林区署(1)、青森大林区署喜良市小林区署(1)、青森大林区署増川小林区署官行事業係(1)、青森大林区署大鰐小林区署官行事業係(1)、秋田大林区署(5)、秋田大林区署能代小林区署(1)、秋田大林区署角館小林区署(2)、秋田大林区署新庄小林区署(1)、東京大林区署(1)、東京大林区署浪江小林区署(1)、東京大林区署平小林区署(1)、東京大林区署水戸小林区署(1)、大阪大林区署(1)、大阪大林区署船津小林区署(1)、高知大林区署林業課(1)、高知大林区署久万小林区署(1)、高知大林区署宿毛小林区署(1)、高知大林区署下川口小林区署(1)、熊本大林区署水俣小林区署(1)、鹿児島大林区署利用係(1)
1916年11月	青森大林区署(3)、青森大林区署利用係(1)、青森大林区署施業案係(2)、青森大林区署大鰐小林区署官行事業係(1)、青森大林区署川尻小林区署(1)、青森大林区署喜良市小林区署(1)、青森大林区署三本木小林区署(1)、青森大林区署水沢小林区署(1)、秋田大林区署(3)、秋田大林区署能代小林区署(2)、秋田大林区署鶴岡小林区署(1)、秋田大林区署角館小林区署(1)、秋田大林区署花輪小林区署(1)、秋田大林区署湯沢小林区署(1)、東京大林区署(2)、東京大林区署郡山小林区署(1)、東京大林区署岩村田小林区署(1)、東京大林区署水戸小林区署(1)、東京大林区署平小林区署(1)、大阪大林区署(1)、大阪大林区署日原小林区署(1)、高知大林区署林業課(1)、高知大林区署窪川小林区署(1)、高知大林区署久万小林区署(1)、熊本大林区署(1)、熊本大林区署人吉小林区署(2)、熊本大林区署多良木小林区署(1)、鹿児島大林区署山野小林区署(1)
1917年11月	青森大林区署(6)、青森大林区署施業案係(2)、青森大林区署深浦小林区署(1)、青森大林区署中里小林区署(1)、青森大林区署三本木小林区署(1)、青森大林区署水沢小林区署(1)、秋田大林区署(6)、秋田大林区署楯岡小林区署(1)、秋田大林区署鶴岡小林区署(1)、秋田大林区署花輪小林区署(1)、秋田大林区署能代小林区署(1)、東京大林区署(2)、東京大林区署久留里小林区署(1)、東京大林区署臼田小林区署(1)、大阪大林区署(1)、大阪大林区署日原小林区署(1)、大阪大林区署新宮小林区署(1)、大阪大林区署都山小林区署(1)、大阪大林区署倉吉小林区署(1)、高知大林区署林業課(1)、高知大林区署宇和島小林区署(1)、高知大林区署久万小林区署(1)、高知大林区署西條小林区署(1)、熊本大林区署(1)、熊本大林区署人吉小林区署(1)、熊本大林区署多良木小林区署(1)、熊本大林区署福田小林区署(1)、鹿児島大林区署山野小林区署(1)

典拠)『林学会報』第1号～第10号(1907年1月～1914年12月)所載の「会員名簿」及び『林学会々員名簿 大正五年十一月末日現在』、『シルバ会林学会会員名簿 大正六年十一月末日現在』。

表6は農商務省山林局で勤務した卒業生の勤務地一覧である。山林局は北海道を除く国内の国有林を管理していた機関で、管理のために大小林区署を設置していた。大小林区署

の設置範囲には変更があるが、たとえば1913年には、大林区署には青森、秋田、東京、大阪、高知、熊本、鹿児島があり、青森大林区署は青森県、岩手県、宮城県に位置する小林区署を、秋田大林区署は秋田県、山形県に位置する小林区署を、東京大林区署は東京府、福島県、栃木県、茨城県、千葉県、神奈川県、埼玉県、群馬県、新潟県、長野県、山梨県、静岡県に位置する小林区署を、大阪大林区署は大阪府、富山県、石川県、福井県、滋賀県、京都府、岐阜県、愛知県、三重県、奈良県、和歌山県、兵庫県、岡山県、広島県、山口県、島根県、鳥取県に位置する小林区署を、高知大林区署は高知県、徳島県、愛媛県、香川県に位置する小林区署を、熊本大林区署は熊本県、福岡県、大分県の一部、佐賀県、長崎県に位置する小林区署を、鹿児島大林区署は鹿児島県、宮崎県、大分県の一部、沖縄県に位置する小林区署を管轄していた¹⁵⁾。

卒業生の各大小林区への配置については、1907年に「宮城大林区署」、「東京大林区署」、「鹿児島大林区署」に各1名が配置されるように、全国に渡っていたことが見て取れる。なかでも「青森大林区署」、「宮城大林区署」「秋田大林区署」「高知大林区署」には、1910年10月から1917年11月にかけて、管内の複数の小林区署に卒業生が配置されている。

表7 森林科・林学科・林学実科卒業生の宮内省御料局・帝室林野管理局勤務先一覧（1907-1917年）

年月	勤務先(人数)
1907年1月	札幌支庁(2)
1909年5月	札幌支庁(2)、札幌支庁空知出張所(1)、札幌支庁夕張出張所(1)、羽幌出張所(1)、青森支庁(2)
1910年10月	札幌支庁(2)、札幌支庁夕張出張所(1)、羽幌出張所(1)、青森支庁函館出張所(2)、青森支庁江差出張所(1)、名古屋支庁岡崎出張所(1)
1911年	札幌支庁(2)、札幌支庁夕張出張所(1)、札幌出張所(1)、羽幌出張所(1)、青森支庁函館出張所(1)、青森支庁江差出張所(1)、青森支庁野辺地出張所(1)、名古屋支庁岡崎出張所(1)
1912年5月	札幌支庁苫小牧出張所(1)、札幌支庁空知出張所(1)、札幌支庁夕張出張所(2)、羽幌出張所(2)、名寄出張所(1)、江差出張所(1)、深川出張所(1)、青森支庁函館出張所(1)、青森支庁野辺地出張所(1)、名古屋支庁新城出張所(1)
1912年12月	札幌支庁空知出張所(1)、札幌支庁夕張出張所(2)、羽幌出張所(1)、苫小牧出張所(1)、弟子屈出張所(1)、札幌支庁名寄出張所(1)、江差出張所(1)、深川出張所(1)、青森支庁函館出張所(1)、青森支庁野辺地出張所(1)、名古屋支庁新城出張所(1)、静岡支庁(1)
1913年11月	札幌支庁苫小牧出張所(1)、青森支庁函館出張所(1)、空知出張所(1)、札幌支庁士別出張所(1)、札幌支庁増毛出張所(1)、羽幌出張所(1)、上川出張所(1)、名寄出張所(1)、夕張出張所(1)、江差出張所(1)、深川出張所(1)、野辺地出張所(1)、名古屋支庁(1)、掛川出張所(1)
1914年12月	設計係(1)、札幌支局函館出張所(1)、札幌支局苫小牧出張所(1)、札幌支局士別出張所(1)、札幌支局増毛出張所(1)、札幌支局上川出張所(1)、札幌支局空知出張所(1)、名寄出張所(1)、夕張出張所(1)、深川出張所(1)、江差出張所(1)、千頭出張所(1)、野辺地出張所(1)、名古屋支局(1)
1916年11月	札幌支局江差出張所(2)、札幌支局下芦別出張所(1)、札幌支局士別出張所(1)、札幌支局羽幌出張所(1)、札幌支局留萌出張所(1)、名寄出張所(1)、深川出張所(1)、函館出張所(1)、野辺地出張所(1)、千頭出張所(1)、佐渡出張所(1)、名古屋支局(1)、名古屋支局七宗出張所(1)、苫小牧出張所(1)

年月	勤務先(人数)
1917年11月	札幌支局江差出張所(2)、札幌支局下芦別出張所(1)、札幌支局士別出張所(1)、札幌支局羽幌出張所(1)、札幌支局留萌出張所(1)、苫小牧出張所(1)、名寄出張所(1)、深川出張所(1)、函館出張所(1)、野辺地出張所(1)、千頭出張所(1)、佐渡出張所(1)、名古屋支局阿多野出張所(1)、名古屋支局七宗出張所(1)

典拠)『林学会報』第1号～第10号(1907年1月～1914年12月)所載の「会員名簿」及び『林学会々員名簿 大正五年十一月末日現在』、『シルバ会林学会会員名簿 大正六年十一月末日現在』。

表7は宮内省御料局・帝室林野管理局で勤務した卒業生の勤務地一覧である。

北海道に所在する御料林の行政機関には、渡島国に所在する函館、江差出張所を管轄する「青森支庁」と、前者を除く道内全域を管轄する「札幌支庁」に分かれていた。札幌支庁が管轄する出張所は、苫小牧、札幌、夕張、空知、深川、増毛、羽幌、上川、士別、名寄、中川、上川の十二カ所であった¹⁶⁾。

表7によると、1912年12月には、各地の出張所で勤務していた卒業生13名のうち、道内の出張所で勤務するのは11名で、道外で勤務していたのは「名古屋支庁新城出張所」、「静岡支庁」で勤務していた2名であった。同様に、1913年の道外勤務者は14名中3名、1914年には12名中3名、1916年には15名中6名であった。道外の勤務者が少しずつ増えているとはいえ、北海道内の出張所で勤務する卒業生が多いといえよう。

表8 森林科・林学科・林学実科卒業生の諸省庁勤務先一覧(1907-1917年)

年月	勤務先(人数)
1907年1月	
1909年5月	
1910年10月	鉄道院北海道鉄道管理局(3)、鉄道院北海道鉄道管理局函館在勤(1)
1911年	鉄道院北海道鉄道管理局(2)、鉄道院北海道鉄道管理局函館在勤(1)
1912年5月	鉄道院北海道鉄道管理局札幌在勤(1)、鉄道院函館保線事務所(1)
1912年12月	鉄道院北海道鉄道管理局工務課札幌在勤(2)、鉄道院北海道鉄道管理局函館保線掛出張所(1)、鉄道院東部鉄道管理局(1)、内務省大阪土木出張所(1)
1913年11月	鉄道院北海道鉄道管理局(1)、鉄道院北海道鉄道管理局技術課(1)、鉄道院函館保線係事務所(1)、鉄道院青森保線係事務所(1)、鉄道院秋田保線事務所(1)、内務省大阪土木派出所下田上砂防工場(1)
1914年12月	鉄道院北海道鉄道管理局(3)、鉄道院北海道鉄道管理局函館保線係事務所(1)、鉄道院秋田保線事務所(1)、内務省大阪土木派出所下田上砂防工場(1)
1916年11月	鉄道院北海道鉄道管理局(3)、鉄道院北海道鉄道管理局函館保線係事務所(1)、鉄道院東部鉄道管理局福島保線事務所(1)、内務省大阪土木派出所岩根砂防工場(1)
1917年11月	鉄道院北海道鉄道管理局(3)、鉄道院北海道鉄道管理局函館保線係事務所(1)、鉄道院東部鉄道管理局福島保線事務所(1)、内務省大阪土木派出所岩根砂防工場(1)

典拠)『林学会報』第1号～第10号(1907年1月～1914年12月)所載の「会員名簿」及び『林学会々員名簿 大正五年十一月末日現在』、『シルバ会林学会会員名簿 大正六年十一月末日現在』。

表8は、農商務省山林局、宮内省御料局・帝室林野管理局以外の省庁に勤務する卒業生の勤務地一覧である。1910年以降は鉄道院が所管する「北海道鉄道管理局」、「東部鉄道管理局」のほか、1912年から1914年には内務省が所管する「大阪土木出張所」や「下田上砂防工場」「岩根砂防工場」で勤務していた卒業生がいた。

表9 森林科・林学科・林学実科卒業生の在外地官庁等勤務先一覧（1907-1917年）

年月	勤務先（人数）
1907年1月	台湾総督府(2)
1909年5月	韓国統監府(1)、韓国統監府農工部平壤樹苗養成所(1)、樺太庁敷香支庁(1)、樺太庁大泊支庁(1)、台湾総督府(1)、台湾総督府農事試験場(1)
1910年10月	朝鮮総督府農商工部山林局(7)、朝鮮総督府殖産局山林課(1)、朝鮮総督府平壤樹苗養成所(1)、樺太庁林務係(1)、樺太庁大泊支庁(1)、台湾総督府農事試験場(1)
1911年	朝鮮総督府(1)、朝鮮総督府平安南道庁(1)、朝鮮総督府農商工部山林局(9)、朝鮮総督府統監部山林課(2)、朝鮮総督府江原道庁(1)、朝鮮総督府殖産局山林課(1)、樺太庁大泊支庁(1)、樺太庁林務係(1)
1912年5月	朝鮮総督府平安南道庁(1)、朝鮮総督府農商工部山林局(1)、朝鮮総督府農商工部農林局(8)、朝鮮総督府平安北道庁(1)、朝鮮総督府江原道庁内務部(1)、朝鮮総督府殖産局山林課(1)、朝鮮総督府木浦林業事務所(1)、樺太庁大泊支庁(1)、南満州鉄道株式会社(1)
1912年12月	朝鮮総督府(13)、朝鮮総督府農商工部農林局山林課(1)、朝鮮総督府平安南道庁(1)、朝鮮総督府平安北道庁(1)、朝鮮総督府江原道庁(1)、朝鮮総督府木浦林業事務所(1)、朝鮮総督府慶尚南道庁(1)、樺太庁大泊支庁(1)、台湾総督府台中県庁林務(1)、南満州鉄道株式会社(1)
1913年11月	朝鮮総督府農商工部山林課(10)、朝鮮総督府平安南道内務部(2)、朝鮮総督府平安北道内務部(1)、朝鮮総督府江原道内務部(1)、朝鮮総督府全羅北道内務部(1)、朝鮮総督府全羅南道内務部(1)、朝鮮総督府忠清北道内務部(1)、朝鮮総督府慶尚南道内務部(2)、樺太庁林務課(1)、台湾総督府台中庁農会(1)、南満州鉄道株式会社地方課産業係(1)
1914年12月	朝鮮総督府(1)、朝鮮総督府農商工部山林課(12)、朝鮮総督府平安南道内務部(3)、朝鮮総督府平安北道内務部(1)、慶尚南道内務部(2)、全羅南道内務部(1)、忠清北道内務部(1)、朝鮮総督府新義州営林廠(3)、樺太庁林務課(1)、台湾総督府殖産局(1)、台湾総督府台中庁農会(1)、南満州鉄道株式会社地方課産業係(1)
1916年11月	朝鮮総督府農商工部山林課(9)、朝鮮総督府新義州営林廠(6)、朝鮮総督府臨時土地調査局(1)、朝鮮総督府咸鏡南道内務部(1)、朝鮮総督府江原道庁(1)、朝鮮総督府江原道内務部(1)、朝鮮総督府平安北道庁(1)、朝鮮総督府平安北道内務部(1)、朝鮮総督府平安南道内務部(1)、朝鮮総督府全羅南道内務部(1)、朝鮮総督府忠清北道内務部(1)、朝鮮総督府慶尚南道内務部(1)、樺太庁(1)、樺太庁林務課(1)、台湾総督府殖産局(1)、台湾総督府営林局(1)、台湾総督府宜蘭庁(1)、南満州鉄道株式会社地方課(1)、南満州鉄道会社熊岳城産業試験場(1)
1917年11月	朝鮮総督府農商工部山林課(5)、朝鮮総督府慶尚北道(1)、朝鮮総督府咸鏡南道内務部(1)、朝鮮総督府江原道庁(1)、朝鮮総督府江原道内務部(1)、朝鮮総督府京畿道内務部(1)、朝鮮総督府全羅南道庁(1)、朝鮮総督府全羅南道内務部(1)、朝鮮総督府平安南道内務部(1)、朝鮮総督府平安北道庁(1)、朝鮮総督府平安北道内務部(1)、朝鮮総督府平安北道中江鎮営林支廠(1)、朝鮮総督府忠清北道内務部(1)、朝鮮総督府慶尚南道内務部(2)、朝鮮総督府新義州営林廠(5)、朝鮮総督府李王職帝釈山林業事務所(1)、樺太庁林務課(1)、台湾総督府殖産局(1)、台湾総督府専売局(1)、台湾総督府台中庁(1)、台湾総督府台北庁(1)台湾総督府宜蘭庁(1)、関東都督府金州民政支署殖産係(1)、南満州鉄道株式会社(2)、南満州鉄道株式会社地方課(1)

典拠）『林学会報』第1号～第10号（1907年1月～1914年12月）所載の「会員名簿」及び『林学会々員名簿 大正五年十一月末日現在』、『シルバ会林学会会員名簿 大正六年十一月末日現在』。

表9は、朝鮮、台湾、樺太といった「外地」の機関に勤めた卒業生数の一覧である。1907年に「外地」で勤務していた卒業生は、「台湾総督府」で勤務していた2名のみであった。1909年には「韓国統監府」で2名が勤務していた。1910年8月の韓国併合及び「朝鮮総督府」の設置を経た1911年には、朝鮮総督府で勤務する卒業生が13名に増加した。彼らは、「統監部山林課」、「殖産局山林課」といった総督府内の山林に関する部局以外に、「平安南道庁」「江原道庁」といった地方庁でも勤務していた。

また、1909年には、表9内ではじめて「樺太庁」（1907年4月設置）で勤務していた卒業生を確認できる。1912年5月には、「南満州鉄道株式会社」で勤務した卒業生も見える。

表10 森林科・林学科・林学実科卒業生の北海道庁勤務先一覧（1907-1917年）

年月	勤務先（人数）
1907年1月	北海道庁(1)、林政課(8)、地方林業課(2)、林務室蘭派派出所(1)、林務浦河派出所(1)、林務浜益派出所(1)、林務厚真分署(1)、林務函館派出所(1)
1909年5月	林務係(22)、地方林業係(1)、林務羽幌出張所(1)、旭川事務所(2)、上川営林区署(1)、桧山分署(1)、野幌林業試験場(2)
1910年10月	北海道庁(4)、林務係(11)、地方林業係(2)、地方林業係旭川在勤(1)、上川営林区署(1)、札幌営林区署小樽分署(1)、室蘭営林区分署(1)、林業試験場(1)
1911年	北海道庁(8)、林務係(9)、地方林業係旭川在勤(1)、上川営林区署(1)、札幌営林区署小樽分所(1)、網走営林区分署(1)、野幌試験場(2)
1912年5月	北海道庁(12)、林務課調査部(2)、造林部(1)、札幌営林区署(1)、小樽営林区署(1)、旭川事務所(1)、釧路営林区署(2)、網走営林区分署(1)、野幌林業試験場(2)
1912年12月	北海道庁(14)、林務課(3)、旭川事務所(1)、釧路営林区署(1)、札幌営林区署浦河分署(1)、網走営林区署(3)、網走営林区署紋別分署(1)、函館営林区署(1)、上川営林区署(1)、野幌林業試験場(2)
1913年11月	拓殖部林務係(3)、釧路営林区署(1)、網走営林区署(1)、浦河営林区署(1)、函館営林区分署(1)、野幌林業試験場(1)
1914年12月	北海道庁(1)、林務係(11)、拓殖部林務課(1)、地方林業係(3)、札幌営林区署(1)、釧路営林区署(3)、網走営林区署(2)、上川営林区署(1)、室蘭営林区分署(1)、根室営林区分署(1)、函館営林区分署(1)、浦河営林区分署(1)、河西営林区分署(1)、野幌林業試験場(2)
1916年11月	北海道庁(7)、拓殖部林務課(3)、地方林業係(1)、札幌営林区署(2)、網走営林区署(4)、室蘭営林区分署(2)、浦河営林区分署(1)、河西営林区分署(2)、枝幸営林区分署(1)、天塩営林区分署(2)、宗谷営林区分署(2)、桧山営林区分署(2)、倶知安営林区分署(1)、根室営林区分署(1)、函館営林区分署(1)、野幌林業試験場(3)
1917年11月	北海道庁(4)、拓殖部林務課(5)、地方林業係(1)、札幌営林区署(2)、網走営林区署(4)、釧路営林区署(1)、河西営林区分署(2)、室蘭営林区分署(2)、枝幸営林区分署(1)、浦河営林区分署(2)、宗谷営林区分署(1)、桧山営林区分署(2)、手塩営林区分署(2)、倶知安営林区分署(1)、倶知安地方費林業事務所(1)、根室営林区分署(1)、野幌林業試験場(3)

典拠)『林学会報』第1号～第10号(1907年1月～1914年12月)所載の「会員名簿」及び『林学会々員名簿 大正五年十一月末日現在』、『シルバ会林学会会員名簿 大正六年十一月末日現在』。

表10は、北海道庁で勤務していた卒業生の勤務先一覧である。北海道庁で勤務する卒業生の勤務先について、部署が判明している場合は、ほとんどが林野の管理に当たる部署で

ある。

卒業生の勤務先には「林務係」「地方林業係」がある。1905年に設定した公有林「北海道地方費模範林」の管理は、「林務係」が担当していた¹⁷⁾。表10によると、「林務係」として勤務した卒業生は、1909年に22名、1910年に11名、1911年に9名と変動している。

また、北海道庁拓殖部は、北海道に所在する国有林の管理をも担っていた。国有林の管理は、1907年まで、林務課派出所15カ所と分所が森林監護及び森林調査に関する事項を担当していたが、1908年、北海道庁は管理機構を変更し、林務課派出所を廃止するとともに、札幌、上川、函館、釧路、網走の五カ所に技師を署長とする「営林区署」を、営林区署の下に技師もしくは属を署長とする「営林区分署」を設置した¹⁸⁾。表10でいえば、1907年の「林務室蘭派出所」、1909年の「上川営林区署」勤務者は、両者ともに国有林の担当者に該当する。

なお、1908年に設置された野幌林業試験場では、設置翌年の1909年5月には卒業生2名が勤務を開始していた。

表11 森林科・林学科・林学実科卒業生の府県庁・郡役所勤務先一覧（1907-1917年）

年月	勤務先（人数）
1907年1月	福島県庁第三部農務課(1)、山梨県庁(1)、福井県庁(1)、山口県(1)
1909年5月	青森県庁(1)、宮城県庁(1)、宮城県庁林務係(1)、福島県庁(1)、長野県庁(1)、新潟県(1)、福井県庁林業係(1)、山口県(1)
1910年10月	青森県庁(1)、宮城県庁(1)、福島県庁(2)、新潟県(1)、山梨県庁(1)、長野県庁(1)、山口県(1)、福岡県田川郡役所(1)
1911年	宮城県(2)、福島県内川郡役所(1)、新潟県(1)、山梨県庁(1)、長野県庁(2)、福井県(1)、三重県(1)、山口県(1)
1912年5月	宮城県(2)、山梨県(1)、長野県(2)、新潟県(1)、三重県(1)、愛媛県庁林務課(1)、島根県(1)、山口県(1)、福岡県田川郡役所(1)
1912年12月	宮城県(1)、福島県(1)、山梨県庁林務課(1)、長野県庁(1)、長野県庁林務課(1)、新潟県庁林務課(1)、三重県庁林務課(1)、愛媛県庁林務課(1)、島根県(1)、山口県庁林務課(1)、福岡県田川郡役所(1)
1913年11月	宮城県庁内務部(1)、福島県庁内務部(1)、山梨県庁内務部(1)、新潟県内務部勸業課(1)、長野県庁内務部(2)、三重県庁(1)、愛媛県庁内務部(1)、島根県庁内務部(1)、山口県庁内務部(1)、福岡県田川郡役所(1)、佐賀県庁内務部(1)
1914年12月	宮城県内務部(2)、山梨県庁内務部(1)、長野県庁内務部(1)、新潟県庁内務部勸業課(1)、三重県庁内務部(1)、愛媛県庁内務部(1)、徳島県庁内務部(1)、山口県庁内務部(1)、島根県庁内務部(1)、福岡県田川郡役所(1)、佐賀県庁内務部(1)、高知県幡多郡郡役所(1)、高知県安芸郡役所(1)
1916年11月	岩手県内務部(1)、宮城県庁内務部(2)、山形県(1)、山形県内務部林務課(1)、群馬県庁林務課(1)、東京府下目黒林業試験場(1)、山梨県内務部(1)、長野県庁内務部(1)、新潟県内務部勸業課農林係(1)、静岡県内務部(1)、岐阜県庁(1)、三重県庁内務部(1)、高知県庁林務課(1)、徳島県庁内務部(1)、愛媛県庁内務部(1)、島根県庁内務(1)、山口県庁内務部(2)、佐賀県庁内務部(1)、大分県内務部(1)、長野県下伊那郡郡役所(1)、高知県安芸郡役所(1)、福岡県田川郡役所(1)

年月	勤務先 (人数)
1917年11月	青森県庁内務部(1)、岩手県庁内務部(1)、宮城県庁内務部(2)、山形県(2)、山形県内務部林務課(1)、福島県(1)、群馬県庁林務課(1)、新潟県内務部勤業課農林係(1)、富山県庁内務部(1)、福井県庁林務課(1)、山梨県内務部(1)、岐阜県庁内務部(1)、長野県庁内務部(3)、三重県庁内務部(1)、高知県内務部(2)、高知県庁林務課(1)、徳島県庁内務部(1)、愛媛県庁内務部(1)、山口県庁内務部(1)、山口県庁内務部農務課(1)、島根県庁内務部(1)、佐賀県庁内務部(1)、熊本県庁内務部農商課(1)、大分県庁内務部(1)、福岡県田川郡役所(1)、福岡県鞍手郡役所(1)

典拠)『林学会報』第1号～第10号(1907年1月～1914年12月)所載の「会員名簿」及び『林学会々員名簿 大正五年十一月末日現在』、『シルバ会林学会会員名簿 大正六年十一月末日現在』。

表11は、他府県の県庁、郡役所で勤務していた卒業生の勤務先一覧である。表11によると、1907年～1912年12月には、各年10名程度の人数が他府県の県庁、郡役所で勤務している。1913年以降、勤務者数が増加し、1913年には12名、1916年には24名、1917年には27名となった。1907年に卒業生1名が「愛媛県庁林務係」で勤務し、1909年には「宮城県庁林務係」、「福井県庁林業係」で各1名が勤務しているなど、森林の管理・林業に関する部署での勤務が見られる。

勤務先の府県は、青森県、岩手県、宮城県、山形県、福島県、群馬県、新潟県、山梨県、長野県、岐阜県、三重県、福井県、愛媛県、高知県、島根県、山口県、福岡県、佐賀県、大分県、熊本県の20県にわたる。

おわりに

本稿では、札幌農学校森林科・林学科、東北帝国大学農科大学林学科・林学実科卒業生の卒業後の動向について、特に1907年から1917年を対象として調査を行った。

卒業生は、農商務省山林局、宮内省御料局及び帝室林野局、北海道庁の林務課や営林区署など、森林の管理を行う機関で勤務している場合が多い。勤務地については機関ごとに傾向がある。山林局では青森大林区署、秋田大林区署、高知大林区署に複数名の卒業生が勤務するものの、他の大林区署で勤務する卒業生もおり、卒業生の勤務地は全国に渡る一方、帝室林野局では、北海道内で勤務する卒業生がほとんどであった。

また、「外地」の機関に勤務する卒業生もいた。最も多い勤務先は朝鮮総督府であった。そのほか、樺太庁、台湾総督府、半官半民の南満州鉄道株式会社、関東都督府でも、卒業生が勤務していた。

北海道庁は道内の国有林と地方公有林を管理しており、卒業生はどちらの部署にも配属されていた。北海道庁以外に、卒業生は府県の県庁、郡役所でも勤務していた。

本稿で調査した卒業生の勤務先、職種の傾向は、札幌農学校、東北帝国大学農科大学における林学教育に立脚するものとして位置づけられると考えている。1918年以降の官公庁での勤務者の動向、また、官公庁以外の勤務者の動向については、今後の課題としたい。

〔注〕

- 1) 「森林科規程」、『札幌農学校一覧 自明治三十二年至明治三十三年』、1899年1月、57頁。
- 2) 「森林科規程」、『札幌農学校一覧 自明治三十四年至明治三十五年』、1901年12月、61頁。
- 3) 「林学科規程」、『札幌農学校一覧 自明治三十八年至明治三十九年』、1905年12月、58-61頁。
- 4) 「農学実科土木工学科林学科及水産学科通則」、『東北帝国大学農科大学一覧 自明治四十年至明治四十一年』、1907年12月、43・52頁。
- 5) 「北海道帝国大学農学実科及林学実科規則」、『北海道帝国大学一覧 自大正八年至大正九年』、1920年6月、116・125-126頁。
- 6) 1945年6月の林学実科の廃止と同時に、北海道帝国大学農林専門部が開設された。農林専門部は、1951年3月に廃止された。
- 7) 「統計8 北海道帝国大学・北海道大学学生生徒数（1918～1953）」、『北大百年史 通説』（北海道大学、1982年、152-174頁）より算出した。
- 8) 『林学会報』は、1907年3月から1919年6月にかけて第1号～第17号が刊行された。第1号（1907年3月発行）「卒業生状況」、第3号（1909年6月以降発行）「賛助会員動静 明治四十二年五月調（姓名いろは順）」、第4号（1910年11月発行）「賛助会員動静 明治四十三年十月調」、第5号（1911年12月以前発行）、「賛助会員動静」、第6号（1912年5月以降発行）「賛助会員動静」、第7号（1912年12月発行）「会員消息」、第8号（1913年12月発行）「会員名簿 大正二年十一月調」、第10号（1914年12月発行）「会員名簿」を参照した。なお、第2号（1908年3月発行）、第11号（1915年6月発行）、第12号（1915年12月発行）、第13号（1916年11月発行）「会員動静」には一部の卒業生について記載があるため、適宜参照した。また、北海道帝国大学農学部附属林学実科が卒業生を送り出す1918年7月以降の卒業生の情報を含む第14号（1917年6月発行）、第16号（1918年7月発行）、第17号（1919年6月発行）所載の「会員動静」、第15号（1918年2月発行）「通信」について、1917年以前の卒業生については適宜参照し、1918年7月以降の卒業生については今後の課題とする。
- 9) 『林学会々員名簿 大正五年十一月末日現在』（林学会、1916年11月、北海道大学大学文書館蔵）、『シルバ会林学会会員名簿 大正六年十一月末日現在』（シルバ会林学会、1917年11月、北海道大学大学文書館蔵）を参照した。
- 10) 『北海道帝国大学一覧 自昭和二年至昭和三年』（1928年）所収の「卒業生職業別表」（1927年6月末日現在）は、項目「農会其他技術員」を立て、1927年卒業生5名を集計しているが、本稿では「会社員」の項目に入れるべきところを誤ったものと推定し、「会社員」として算出した。当該統計に最も近い時期の名簿『昭和二年十一月現在 シルバ会札幌林学会会員名簿』（シルバ会札幌林学会、1927年11月）によると、1927年卒業生で「農会」等に勤務する者は見えず、民間企業の勤務者5名（「富士製紙株式会社」4名、「朝鮮京城黄海社員」1名）を確認できる。
- 11) 「1902年10月」欄については、「技術者」3名のうち、伊藤彌次郎・廣瀬久雄は1902年10月に「北海道庁技手」となったことが確認できるため（『文武会雑誌』第40号、1903年3月、62頁）、「技術者」3名のうち官公庁で勤務していた両名については、「技術官」に組み入れ、「技術官」2名、「その他」1名として集計した。
- 12) 『文武会雑誌』第40号、札幌農学校文武会、1903年3月、62頁。
- 13) 「農商務省ニ臨時職員設置ノ件」、勅令第100号、1911年4月。
- 14) 「林区署官制中改正」、勅令第195号、1913年6月。
- 15) 「林区署官制中改正」、勅令第195号、1913年6月。
- 16) 『北海道森林誌』、北海道庁拓殖部、1912年7月、35頁。
- 17) 『北海道森林誌』、北海道庁拓殖部、1912年7月、53-55頁。
- 18) 『北海道森林誌』、北海道庁拓殖部、1912年7月、33-34・39-40頁。

〔後記〕 本研究は、JSPS 科研費 JP20K1383800の助成を受けたものである。

（ささき ともしよ／北海道大学大学文書館員）